

自閉症児A君との音楽療法

—音言語によるコミュニケーションを通して—

佐治 順子、佐治 亜矢子¹、上西 普子²

宮城大学看護学部

キーワード

音楽療法、自閉症、コミュニケーション、応答、即興演奏、音言語
music therapy, autism, communication, response, improvisation, musical word

要 旨

多動性の自閉症児は、家族又はごく近い関係者以外の人とコミュニケーションをとることが困難であり、自分の意志が伝わらないストレスからくる過食症や拒食症、または行動の混乱などが問題となることがある。本稿は、2000年11月から5ヶ月間に実施した多動性のある重度自閉症児への音楽療法の事例研究である。10歳の男児（A君）は、最初のセッションではほとんど関わりがもてなかったが、次第に音楽や楽器演奏に関心をもち、最終回のセッションには、筆者と楽器演奏による音会話と即興演奏に興じ、約10分間音楽に集中することができた。またセッションの経過と共に、有意な自発的表現やリラックスした行動変化もみられたことなどから、本稿の有意語をもたない自閉症児A君への音楽療法は、音言語による心のコミュニケーションが充分期待できることを示唆した。

A Case Study Of Musical and Emotional Communication With A Ten-Year-Old Autistic Boy
Through Music Therapy Practice

Nobuko Saji, Ayako Saji¹, Hiroko Uenishi²

School of Nursing, Miyagi University

Abstract

It is generally difficult for an autistic and active child without significant spoken language to communicate with persons other than family members. There are many reported cases in which severe stress and frustration caused by the lack of communication with others leads to overeating, self-starvation or abnormal actions.

This study reports on five months of music therapy for an active ten-year-old Japanese boy with serious autism. Though he could not communicate with music during the first session, he became interested in music and playing instruments with sessions continued. During the final ten minute session he responded to a music therapist through musical words and improvisational music. Music therapy can help establish to communicate with persons using musical words, especially clients suffering from a lack of spoken language, because musical words can directly affect human minds, emotions and bodies.

1) 神奈川県大磯町立大磯中学校教諭 Oiso Junior High School in Kanagawa, Japan.

2) 宮城大学事業構想学部事業計画学科2年
Department of Project Planning, School of Project Design, Miyagi University

【はじめに】

2001年2月4日に宮城大学で開催された看護学部公開講座「英国音楽療法の理論と実践」以来、宮城県仙台地区においても病院や養護学校関係者だけでなく、地域の保健所や一般市民、特に若い世代の高校生や大学生らも、音楽療法に強い関心をもつようになった。これは嬉しいことであるが、しかし音楽療法がまだ、一般的には特に精神的・身体的障害をもつクライアントへの医療援助としてではなく、健常者を含む人々のストレス解消のためにあるレクリエーション音楽として、捉えられていることも事実である。そもそも障害児・者の身体の動きや行動変化からコミュニケーション可能な音言語を抽出し、心の内なる表現を導き出すといった音楽療法は、約50年前に英国音楽療法の創始者であるジュリエット・アルヴァン女史にまでさかのぼることができる。筆者もかつて学生時代に、来日したアルヴァンの音楽療法の講演と彼女自身のチェロ演奏を聴く貴重な機会をもち、音楽することの意味を改めて考えさせられた体験をもっている。

わが国の自閉症児に対する発達心理学的・医学的な研究は、世界的にも評価されているが³、自閉症児への音楽療法研究は浅い⁴。それは音楽療法を受けている対象者が、欧米では発達障害児や精神障害児が多いのに対して、わが国では小児よりもむしろ高齢者の方が圧倒的に多いことと、この障害児分野の研究には民族的な難しさを含んでいるためでもあろう。欧米では発達障害児への音楽療法の実践と研究は非常に盛んで、筆者が口頭発表した2000年11月にセント・ルイスで開催された「アメリカ音楽療法協会50年記念大会」⁵や2001年4月にナポリで開催された「第5回欧州音楽療法学会」⁶でも、発表の6割は小児と青少年領域であり、特にその中でも即興演奏を用いて自発的表現を促すアプローチ法が主流であった。⁷

即興演奏を用いる音楽療法は、たとえばノードフロビズ音楽療法などに代表されるように、わが国でも最近講習会や訳本で紹介されるようになったが⁸、実践で用いた事例研究は数少ない⁹。本稿は、2000年11月～2001年3月に行った多動性の重度自閉症児の音楽療法において、即興演奏を用いた実践を行うことによって、音言語による心のコミュニケーション

が得られ、自己表現への学習の方向性が期待されたので報告する。

【目 標】

対象児A君は、有意語が全くなく、通学している養護学校でも1日中ほとんど個人行動をとり、他人と接触することが困難な多動性自閉症児であったことから、次の二つを音楽療法セッションの目標とした。第一は、なじみのある曲や好きな楽器を用いて音、および音楽に集中させること。第二は、即興演奏を用いてA君自らの自発的表現をひきだし、音言語によるコミュニケーション手段を獲得することである。

【対象者】

対象児A君は10才男児で、現在養護学校に通う重度の自閉症児である。両親とも障害に対する認容と見識をもってA君を温かく見守っている。A君は、じっとしていることが少なく、むしろ身体を動かすことが好きな他動性の児童である。体格は、抜んで大きく、太り気味である。最近特に生活習慣に関わる変化へのこだわりが強く、新しい環境に慣れるのに少々時間を要することを、母親から情報入手した。

【方 法】

- 1) 音楽療法セッション前に、予備調査としてA君の学校を二度訪問した。始めは、開始約1ヶ月前に、A君が通学している学校での生活やクラスの中での学習状況を見学し、合わせて担任教諭からA君の学校生活での様子を聞いた。二度目は、開始約2週間前に行われた、年一度の文化祭発表会の時で、クラス単位の出し物に出演するA君を観察した。A君の家庭生活については、開始1週間前に母親と話す時間を設けた。その結果、テレビの「アンパンマン」をよくみていること、食事の好き嫌いはないこと、最近時計のみかたを覚えて時間を気にするようになったことなどを聞いた。また研究記録のためにセッション中のビデオ撮影を両親の許可を得て、セッション時のアシスタント(佐治亜矢子または上西普子)が撮影した。
- 2) 実際のセッションは、A君の通う養護学校の一

教室で、毎週一回放課後の30～40分、個人セッションの形で合計10回行った。セッション会場では、机と椅子を後部に寄せて自由に動けるスペースを作り、A君とセラピストである筆者(Th)が、ピアノを中心に半円を描くように位置した。ピアノ以外の楽器は、机上に発達障害児が好むドラムやボンゴ、メタルカバサ、クワイアフォーン、トーンチャイムなどを置き、A君が自由に選択演奏できるようにアシスタントがサポートした。

3) 10回のセッション中6回は、A君が母親または父親の同室を希望したので¹⁰、見学を許可した。これは、音楽療法においてクライアントが不安な気持ちのままセッションを行うことは、音楽療法効果にマイナス面が大きいことを考慮してとった処置であり、幼児や低学年児童の音楽療法セッションにおいて、よくとられる方法である。

【結果】

合計10回のセッション経過を、1) セッション中のコミュニケーション 2) セッション中の音楽や楽器に関する集中度に絞って、記録をもとにまとめた(表1参照)。前者のセッション中のコミュニケーションは、さらに二つに細分して観察した。一つは、Thとのかかわりの中でみられた行動変化であり、もう一つはクライアントが音言語(つまり声や楽器の演奏を、あたかも言葉のように使うこと)を通してどのように音楽や楽器とかかわったかである。

1) セッション中のコミュニケーション

第1セッションでは、終始一人で大きなボール

に乗って身体を上下に振って遊んでいた。

Thはその動きに合わせて音楽を提供したが、Thとのアイコンタクトは全くなかった。Thの弾いているピアノの前にきて、Thの手をさえぎって一人だけでピアノの前に座り、音を出したが(約3秒)、直ぐにピアノから離れてしまった。ピアノ以外の他の楽器にはほとんど興味を示さなかった。

第2セッションでは、いつもの帰宅時間への執着が強く、友達の帰る姿を追ってセッションへの参加に強い抵抗を示した。結果的に、行動に落ち着きがなく、ドラムやタンバリンを思いっきり叩いた(約10秒)が、自分の出した音の強さに驚きも示した。その後は母親をセッション会場に呼んで一緒にセッションを行った。

第3セッションでは、セッション会場を学校行事のため、急遽前回の教室と別棟の小ホールに変更して行った。始めは会場探検をし落ち着かなかったが、セッションの後半になってThの投げたサッカーボールを投げ返し(約30秒)、またトーンチャイムを自分からとって鳴らした(約5秒)。また「ジングルベル」のピアノ演奏に、手を後ろに組んで回転運動を始めたので、Thは直ぐにA君の回転の速さに合わせて「ジングルベル」「あわてんぼうのサンタクロース」でピアノ伴奏を続けた(約5分)。この回転運動中に、はじめて「アー」という発声があった。

第4セッションでは、Thのもっていたアンパンマンボールやアンパンマン指人形を取っては、ボンゴの中へ投げて遊んだ(約1分)。A君が自分

表1 セッション時のコミュニケーションと集中時間

| セッション回数 | S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|------------------|--|--------------------------------|---|--|---|
| セラピストとのコミュニケーション | ・終始、一人でボール遊びをし、アイコンタクトもない | ・いつもの帰宅時間への執着が強く、セッション参加へ抵抗を示す | ・ボールを投げ返す | ・セラピストの玩具を取る(アンパンマンボール、指人形) | ・セラピストの弾くアンパンマンを聴きながら寝転ぶ |
| 音言語によるコミュニケーション | | ・ドラム、タンバリンを思いっきり叩く | ・トーンチャイムを手にとる ・「ジングルベル」を聴きながら回転運動は始める ・「アー」という発声がある | ・自ら回転運動を始める(「ゆき」「くるみ割り人形」でピアノ伴奏) ・ドラムの中にボールを入れて遊ぶ | ・「アンパンマン」に合わせてメタル・カバサをリズム奏する ・メタル・カバサで即興演奏の応答がみられた |
| 集中時間 | ピアノ:3秒 | タンバリン:10秒 | 回転運動:5分 ボール遊び:30秒他 | 回転運動:5分 ドラムとボール:1分 | 回転運動:6分 メタル・カバサ:6分 |
| セッション時間 | 20分 | 30分 | 30分 | 30分 | 30分 |
| セッション回数 | S6 | S7 | S8 | S9 | S10 |
| セラピストとのコミュニケーション | ・セラピストと一緒に回転運動を楽しむ。笑顔見られる ・発声しながらセラピストへ接近 | ・セラピストとピアノの傍でセッション終了まで過ごす | ・セラピストの膝の上に寝転がる | ・開始前からセッションの部屋に出入りする | ・掃き際にも戸外からセラピストらを見にくる |
| 音言語によるコミュニケーション | ・自分から回転運動を開始し、ピアノによる即興演奏を要求する | ・即興演奏による模倣見られる(ドラム、タンバリン) | ・自らドラムの傍を取って叩く ・クワイアフォーンによる自発的な表現がみられる | ・「山の音楽家」のリズムに合わせて足を動かす ・クワイアフォーンによる自発的表現を楽しむ | ・ピアノ、トーンチャイムに集中し、自発的表現を楽しむ |
| 集中時間 | 回転運動:10分 | ドラムの模倣:5分 タンバリンの模倣:3分他 | ドラム:5分 クワイアフォーン:2分 | リズム打ち:2分(足ふみ) クワイアフォーン:10分 | ピアノ:5分 トーンチャイム:10分 |
| セッション時間 | 30分 | 50分 | 40分 | 40分 | 50分 |

から時折回転運動を始めたので、Thはすぐに「ゆき」「くるみ割人形」などで回転の速さに合わせてピアノ伴奏をした（約5分）。

第5セッションでは、回転運動（約6分）だけでなく、床に身体を寝かせて転げまわりはじめたので、「アンパンマン」のピアノで伴奏した。その後「アンパンマン」の歌に合わせてメタルカバサを演奏した。このとき、メタルカバサによる即興演奏の応答もみられた（約6分）。

第6セッションでは自分から回転運動（約6分）を始め、その際「アー」「クック」などと声を出しながらThの方へ接近してきた。Thが回転運動に合わせた即興演奏を続けているうちに、笑顔も見せた（約10分）。

第7セッションでは、セッションの始めから笑顔を見せたので、即興演奏でスタートした。その結果、ドラム（約5分）、タンバリン（約3分）、クワイアフォン（約1分）による模倣演奏による応答がみられた。Thとピアノの周りで始めてセッション終了まで過ごした（約40分）。

第8セッションでは、セッション開始と共に自分からドラムの撥を取り演奏を始めたので、ドラムの即興演奏でスタートした（約5分）。またクワイアフォンによる自発的な表現もみられた（約2分）。Thとのピアノの演奏にも興じ、セッション最後にはピアノを弾いているThの膝の上に寝転んだ。

第9セッションでは、セッション開始前から部屋をのぞき、セッションがあることを確かめるような素振り示した。その後、笑顔でThに接近してきていきなりドラムを打ち始めた。さらに「山の音楽家」のピアノ演奏に合わせて、椅子と足を動かし応答した（約2分）。クワイアフォンによる自発的な表現が約10分続いた。

最後の第10セッションでは、なじみのある音楽および即興音楽の双方時においても、自分が好きなトーンチャイム（約10分、譜例1参照）やピアノ（約5分）による自発的な表現を楽しむに至った。またセッション終了後、戸外からセラピストらを見に来て、笑顔で走り去った。

2) セッション中の音楽や楽器に対する集中度

第1、第2セッションでは、楽器およびセッシ

ョンに対してほとんど関心を示さず、終始散漫で、集中することはなかった。

第3、第4セッションでは、回転運動に約5分、第5セッションでは回転運動やメタルカバサにそれぞれ約6分集中することが出来、時折笑顔も見せた。

第6セッションでは、自分から回転運動を始め、Thにピアノ伴奏を催促するようになり、約10分間集中していた。

第7セッションでは、ドラムに約5分とタンバリンに約3分と、第8セッションでは、ドラムに約5分とクワイアフォンに約2分間集中した。またそれぞれのセッション中、異なる2つ以上の楽器に合わせて7～8分間も集中できるようになった。

第9セッションでは、クワイアフォンに約10分と足踏みに約2分、第10セッションでは、トーンチャイムに約10分とピアノに約5分間集中した。また複数の楽器にも、合わせて約12～15分間も集中して、自由に音楽演奏を楽しむ姿が見られるようになった。

10回のセッション中に、A君がかかわった音楽療法セッション時間の合計と、興味を示した楽器や音楽への集中時間をグラフにすると、図1の通りである。

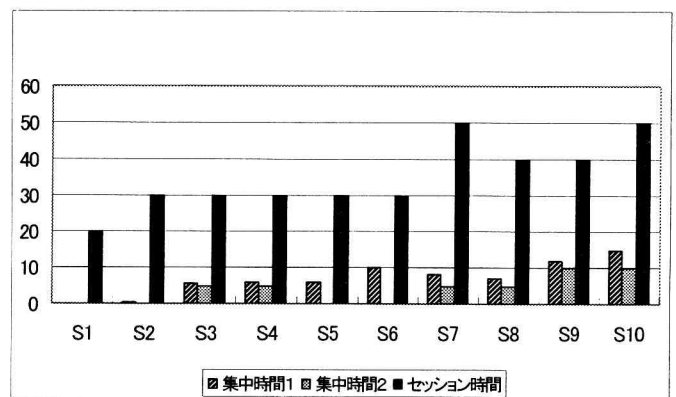


図1：セッションと音楽への集中時間

セッション時間は、一回の音楽療法にかかわった合計時間である。集中時間1は、音楽または楽器を通して集中できた合計時間である。

集中時間2は、1回のセッション中に、2つ以上の音楽または楽器に集中した際、最も長く集中した場合の時間である。

【考察】

1) クライアントとThとのコミュニケーションは、まずA君の活発な身体の動きに合わせたボール遊びと回転運動から始まり、次第にそれらが発声や笑顔を伴った回転運動、そして楽器を使った自発的な表現へと発展したことから、最初のコミュニケーションは、クライアントに最もなじみのある楽曲を、クライアントの身体の動きに合わせたテンポを使ってアプローチを進めることが有効であると考えられる。

また自閉症児の音楽療法では、歌詞がなくても楽器によるリズム打ちや体の動きによる参加を誘導することができる。または発語の模倣やリズム応答を加えていくことによって、音言語によるコミュニケーションへの可能性が期待される。

2) 音楽療法セッションに、クライアントが始めほとんど興味を示さなくとも、あるいは逆に嫌悪感を示したとしても、Thの存在、又は音楽を使ったアプローチの仕方がクライアントにとって気になる存在であったことは確かである。つまりコミュニケーションの第一歩は、まず気に留めさせることから始まり、さらに発展させるためにはその中から有効な音素材を抽出することである。また音楽や楽器に対する興味をもてるように待つこと、時間をかけて自発的な参加を促し続け、学習への方向性に導くことが肝要であると考えられる。

セッションが進むにつれて、次第に集中する時間が伸びた。特にA君は回転運動に約10分間も興じることができたり、また1セッション中に、異なる2つ以上の楽器や音楽に興味を示し、お互いに模倣したり応答することが、約10分間もなされたことなどから、音楽や楽器に対する興味をもてるように誘導し、表現できるまで待つことが有効であったと推察する。特にA君はThが演奏する自分の動きの速さに合った回転運動を通して、Thとコミュニケーションをとるきっかけを見出し、共にセッションに興じることができたと考えられる。

またセッション回数を重ねる毎に楽器や音楽に興味を示し、Thと模倣、応答しながら音楽療法のセッションにたずさわる時間が、合計で20分～50分にまで延長されたことなどから、自閉症児への音言語によるコミュニケーションの可能性が示唆

されたといえる。

セッション中、回転運動をしながら発声や笑顔を表現したり、ピアノを弾くThの膝に、またはテーブルの上に寝転がって、クワイアフォンやトーンチャイムを鳴らすといった行動変化がみられた。これは、A君が、音楽療法の時間を次第にリラックスできる楽しい時間と感じていたことと推測される。またA君との即興演奏を通じた応答会話から、音言語によるクライアントの心的表現の可能性を垣間みることができたように感じる。

そしてこの自閉症児の音楽療法効果を確実なものにするためには、さらに継続したセッションとその観察が必要であると考えられる。

【結び】

以上の結果、考察を踏まえて、次の3点が結論づけられる。

- 1) なじみのある音楽を使って重度自閉症児A君を自然にセッションへ促し、リラックスした気持ちにさせながら、次第にA君の動きに合ったテンポを使って即興演奏を取り入れることが、自発的な表現へ導くために有効である。
- 2) 音楽療法セッションの進行と共に、A君の集中力や学習力が養われたことが確認される。
- 3) A君は、状況把握や有意語の理解にはまだ困難が予想されるが、セッション中に、A君自ら、自発的な演奏を表現できたことにより、今後新たな心のコミュニケーション確立への可能性が期待される。

謝辞

音楽療法セッションを継続するために、毎週放課後、一教室を提供し、セッションのために協力を惜しまなかったA君の学校長はじめ養護学校の先生方に心から感謝する。そしていつもA君を優しく見守り、音楽療法へ全面的に理解を示してくれたA君のご両親へも、厚く御礼申し上げます。なおこの実践には、看護学部公開講座「英国音楽療法の理論と実践」の特別講師のため、丁度来日中であったロンドン・シティ大学リサーチフェローであり、ロンドン・ノードフロビンズ音楽療法研究所の第1級音楽療法士であるジャックリー・ロバーツ女史の特別なスー

パーヴィジョンを得て遂行したことを付記する。

この論文は、2000年6月10日(日)、静岡グランシップで開催された「音楽療法、静岡200」において発表したものをまとめたものである。

参考文献

1) 宮城大学看護学部公開講座「英国の音楽療法の理論と実践」の出席者の中、約25%は高校・大学生であった。また2001年に行われた音楽療法関係の講演やワークショップでも、医療や心理学・生理学・教育学関係者だけでなく、地域の福祉関係者や一般市民、学生の熱心な来聴者が急増している。

2) Alven, J. (1965) *Music for the handicapped child*, Oxford University Press (「心身障害児のための音楽療法」山末質文・谷嘉代子訳、1968、岩崎学術出版)

Alven, J. (1978) *Music therapy for autistic child*, Oxford University Press. (「自閉症児のための音楽療法」山松質文・堀真一郎訳、1982、音楽の友社)

2) 平井信義「小児自閉症」日本小児医事出版社、1968

山松質文「自閉症児の成長過程」臨床心理学研究、医学書院、Vol. 9-4, 1971

石井哲夫「自閉症児の治療と教育」三一書房、1979など。

4) Michel, D.E. (1976) *Music therapy*, Ch. Thomas, Springfield, Illinois. (「障害児教育のための音楽療法入門、清野美紗緒訳1981、音楽の友社」)

音楽の友社編「障害児の成長と音楽」、1984、音楽の友社

大岩みどり、山本悠美子、益子務「自閉症児の言葉の発達を促す音楽療法アプローチ」音楽療法研究第5号、36-44, 2000

菅田文子「音楽療法セッションの中での自閉症児が示す抵抗とは—その意味と対処に関する考察一、音楽療法研究第6号、37-44, 2001

5) Abstracts of the AMTA Conference, *A Time to Remember, A Time to Dream, Celebrating 50 Years of Music Therapy in America*, published by the AMTA, 24-28, Nov. 2000

6) Abstracts of the Vth EMT Congress, published by the EMT Congress, 20-24, Apr., 2001.

7) Wheeler, B. L. (1999) *Experiencing pleasure in working with severely disabled children*. *Journal of Music Therapy*, 36, 56-80.

Robarts, J.Z. (1994) *Towards autonomy and a sense of self: process in music therapy in relation to children and adolescents suffering from early onset anorexia nervosa*, London: Jessica Kingsley Publishers, 229-246

Trevarthen, C. & Robarts, J.Z. (1996) *Children with autism: Diagnosis and Interventions to meet their needs*, London: Jessica Kingsley Publishers, 117-202

Locourt, E. (1991) *Off-beat Music therapy: A psychoanalytic approach to autism*, in Brucia, K.B. (Ed) *Case studies in music therapy: Off-beat Music*, Barcelona Publishers, 73-98.

Pavlicevic, M. (1997) *Music therapy in context. Music, Meaning and Relationship*, London: Jessica Kingsley Publishers, 92-117

8) ノードフロピンス研究会主催の講習会が毎年日本で開催されている。また訳本には、「即興音楽療法の諸理論上」K.E.Brucia、林庸二監訳などがある。

9) Nordoff-Robbins (1973) *Music therapy for handicapped children*, Gollance. (「心身障害児の音楽療法」桜林仁、山田和子訳、1973、日本文化科学社)

10) 2001年1月と2月は大雪であったため、父親が学校の雪かき奉仕作業に来ており、ついでにセッション見学の希望を申し出たので、母親と共に見学を許可した。

譜例 トーンチャイムによる応答 (セッション10)

(1) セラピストの音を聴いて応答

38分15秒

38分20秒

38分33秒

38分42秒

・Thのトーンチャイム

・ThがClにトーンチャイム

・ThがClにトーンチャイム

・Thのピアノに机

(G音)の方に顔を向ける

(D音)を手渡す

(G音)を手渡す

を叩いて応答する

Musical score for example (1) showing Cl, Th (トーンチャイム), and (ピアノ) parts. The score includes time markers (38分15秒, 38分20秒, 38分33秒, 38分42秒) and annotations describing the interaction between the therapist (Th) and the client (Cl). Arrows indicate the direction of gaze and hand movements.

(2) 自由な即興的応答

39分20秒

39分53秒

・Clが自発的にトーンチャイムを鳴らす

・ThがClの音を模倣する

・Clは机を叩いたり大きな声を出して応答する。

Musical score for example (2) showing Cl and Th (ピアノ) parts. The score includes time markers (39分20秒, 39分53秒) and annotations describing the interaction between the therapist (Th) and the client (Cl). Arrows indicate the direction of gaze and hand movements.

40分50秒

41分06秒

41分10秒

41分27秒

・ClがThにトーンチャイムで問いかける

・Thのピアノに回答する

・耳元に手を当てながら音を聴く

・Thのトーンチャイムに回答する

Musical score for example (3) showing Cl, Th (トーンチャイム), and (ピアノ) parts. The score includes time markers (40分50秒, 41分06秒, 41分10秒, 41分27秒) and annotations describing the interaction between the therapist (Th) and the client (Cl). Arrows indicate the direction of gaze and hand movements.